経済産業大臣賞（優秀賞）

水と共に暮らす

北海道　砂川市立砂川中学校　羽川　莉子

私が暮らす砂川市。「砂川」の名前の由来は、アイヌ語の「オタ・ウシ・ナイ」からだという。「オタ」が「砂」、「ウシ」が「多い」、「ナイ」が「川」。そこから「砂川」と名付けられた。名前の通り、砂川は川と深い繋がりがある。

砂川は、石狩川とその支流である空知川が合流する位置にある。明治時代からこの河川を利用してきた。木材の流送や砂利の採取。水田が開かれ、様々な工業も盛んになっていった。やがて人口が増えて砂川市となり、私は今、この町で暮らしている。

私が登校する通学路に橋があり、その下に川が流れている。目を向けると、レジ袋のゴミやペットボトルなどが、無造作に捨てられていた。最初は、嫌だなあと思った程度だった。でも、ゴミの海洋汚染やマイクロプラスチック問題を知ってからは、真剣に受け止めるようになった。人がポイ捨てするゴミが、水を汚す大きな問題を生み出しているのだ。

水を汚すのは、私たちの水への関心が薄いせいではないだろうか。

人間にとって、なくてはならない水。水は、限りある貴重なものである。この日本でも、水不足や水質汚染は現実のものとなっている。そうした環境の中でも、水道から透明なおいしい水が出てくるのは、その仕事に携わっている人たちの努力の賜だ。下水道や河川を管理するのも、全て人の手によるものである。その人たちに水のことを全て任せるだけでは、大切な水は守りきれない。水を使う私たち一人ひとりが、水を守るために行動を起こすべきなのだ。

川と共に暮らしを築いてきた砂川。先人たちの時代から計り知れない苦労と努力を重ね、水の恩恵を受けてきた。水道事業を始め、それは現在も続いている。

石狩川は大きな河川であるため、大雨により川が氾濫し、大きな被害を受けてきた。その被害を防ぐために、八年をかけて砂川に大規模な遊水地を完成させた。遊水地には、大雨が降ったときに石狩川の水を一時的に貯留することで、洪水被害を防ぐ役割がある。そのおかげで、私たちは安心して暮らせているのだ。

砂川の火力発電所では、石狩川の水を利用している。水を加熱して蒸気にし、タービンを回転させて、私たちの暮らしに必要な電力を生み出している。使用済みの温排水は、冬場は流雪溝で歩道の雪を解かすために再利用されている。また、新しくできた化粧品の工場も、工場排水を浄化して、トイレの水として再利用している。しかもその水を再び浄化したあと、池に貯めて水に含まれる余分な養分を微生物や植物に吸収させて、よりきれいな水にしてから石狩川へと流しているのだ。

地域の水を守ってきた苦労の歴史、今も続く水を守るための取組。砂川で暮らす私たち一人ひとりが、しっかりとその思いに応えるべきだと思う。私たちこそが、水の恩恵を直接受けているのだから、水を守るための取組を行っていくことが大切なのだ。

私も、水の出しっぱなしや油や洗剤の排水に気を遣うようになった。ゴミのポイ捨ても絶対にしない。私たちの手で、こうした小さな取組から始めていくことが、水を守ることに繋がっていくのだと思う。中学校でも、地域の清掃活動を行っている。私も参加したとき、水への影響を考えながら、少しでも環境がよくなればと思って、ゴミを拾った。

先日、通学路の川面に鴨がいた。自然豊かな光景に微笑ましく感じた。砂川の遊水地にも、毎年、たくさんの渡り鳥がやってくる。豊かな水が育む豊かな暮らしや自然。水と共に私たちは暮らしている。これからも、水の恩恵に感謝し、水を大切に守りながら、この砂川で暮らしていきたい。